

各 位

武雄・杵島地区農業指導連絡協議会
杵島農業改良普及センター

「稲作情報（第14号）」について（送付）。

このことについて、下記のとおり「稲作情報（第14号）」を送付しますので、業務の参考にしてください。この情報はホームページ（以下URL）にも随時公開しています。
<https://www.pref.saga.lg.jp/kiiji00323270/index.html>

杵島農業改良普及センター

検索

1. 気象概況

アメダス観測値（白石）

月	半旬	平均気温			最高気温			最低気温			降水量			日照時間		
		平年 (°C)	R2 (°C)	平年差 (°C)	平年 (°C)	R2 (°C)	平年差 (°C)	平年 (°C)	R2 (°C)	平年差 (°C)	平年 (mm)	R2 (mm)	平年比 (%)	平年 (hr)	R2 (hr)	平年比 (%)
8月	1	27.9	28.0	0.1	33.3	33.3	0.0	24.0	23.7	-0.3	25.3	0.0	0.0	36.6	48.1	131
	2	27.8			33.2			24.0			26.5			35.5		
	3	27.7			32.9			24.0			28.6			33.1		
	4	27.4			32.6			23.8			29.5			31.7		
	5	27.0			32.2			23.2			30.8			31.5		
	6	26.4			31.7			22.6			39.2			37.8		

1) 8月の気温は、平年並みで推移した。また、日照時間は平年比131と多照となった。

2. 情報田生育概況（調査日：8月10日）

項目 品種(設置場所)	年次	草丈 cm	茎数 本/m ²	主稈 出葉数L	葉色 SPAD	概 要
夢しずく 6/14移植 武雄市橋町	本年値	92.0	355	13.5	34.5	<ul style="list-style-type: none"> 草丈は平年よりやや高く、茎数は平年並み。 主幹出葉数は平年より0.2葉多い。(止葉葉位13.5L) 葉色は平年よりやや濃い。 葉耳間長 +3cm 葉耳間長からみた出穂予想日は8月16日頃 (平年8月14日)
	平年値	89.5	348	13.3	34.0	
	平年比	103	102	+0.2	+0.5	
さかびより 6/20移植 武雄市橋町	本年値	71.7	393	12.5	37.5	<ul style="list-style-type: none"> 草丈は平年より低く、茎数は少ない。 主稈出葉数は平年より0.2葉少ない。 葉色は平年より濃い。 幼穂長 1mm 節間長 3cm
	平年値	74.8	423	12.7	35.9	
	平年比	96	93	-0.2	+1.6	

※夢しずくの平年値はH21～R1の平均値。耕種概要は稲作情報No7参照

※さかびよりの平年値はH21～R1の平均値。耕種概要は稲作情報No9参照

3. 管内の生育状況（8月11日時点）

1) 夢しずく（山間早植え）：5月下旬移植夢しずくで穂揃期である。

《参考》管内における夢しずく生育状況：8/11 時点

移植時期（市町）	生育ステージ	備考
5/23 移植（北方町）	乳熟期	出穂期 8/1 、標高 130m

3) 夢しずく（普通期）：現在、穂孕期～出穂期であり、平年に比べ2～3日程度遅れている。

《参考》管内における夢しずく生育状況：8/11 時点

移植時期（市町）	生育ステージ	備考
6/10 移植（白石町）	穂孕期	葉耳間長 + 3～4 cm

4) ヒノヒカリ・さがびより：幼穂形成期である。草丈は平年並みから低く、一般的に茎数は少ない生育である。

《参考》管内におけるヒノヒカリ・さがびより生育状況：8/10 時点

移植時期（市町）	生育ステージ	備考
さがびより 6/20 移植（武雄市）	幼穂形成期	幼穂長 1 mm ※幼穂形成始期 8/10 頃
ヒノヒカリ 6/25 移植（白石町）	幼穂形成期	幼穂長 3mm ※幼穂形成始期 8/6 頃

4. 今後の管理

1) 山間早植え水稻（主に夢しずく）

- ・幼穂形成期から穂揃期にかけては要水量が増加する時期ですが、湛水状態を長く行うと田面がやわらかくなることと根を傷めるので引き続き間断灌水を行う。**ただし、穂孕み期から穂揃期は浅水管理に努める。**
- ・穂揃期以降は間断灌水を行い、土壌を固めると共に根の活性化を図る。（土が柔らかい圃場では、間断灌水の断水期間を長めにし土を固める。）

2) 夢しずく（普通期）

○現在、穂孕期～出穂期である。水管理は、1) 山間早植え水稻を参照する。

本年は、初期生育量が十分に確保できずに、幼穂形成期以降草丈が伸長しうっぺいした圃場を散見する。また、上位葉に「いもち病」を確認した圃場では臨機防除を行う。

3) 普通期水稻（ヒノヒカリ、さがびより）

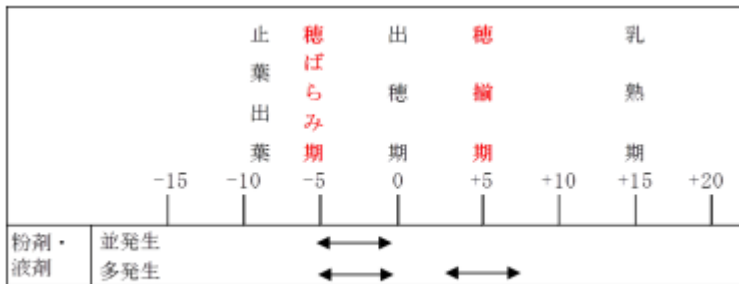
- ・本年は移植後の低温日照不足の影響を受けて、すべての品種が初期生育量を確保できず、梅雨明け後に生育が回復している圃場が多い。そのため、一般的に葉色のさめが平年に比べて緩やかであり葉色は濃い。
- ・現在、生育ステージは幼穂形成期である。水管理は1) 山間早植え水稻を参照する。
- ・穂肥施用の時期となるが、葉色が濃く草丈が伸長しうっぺいした圃場では、上位3、4葉に「葉いもち病（褐点、停止型）」の発生が確認しているため、発生状況や発生部位によっては穂肥施用量を控えるか、減ずる。いずれの品種において「葉いもち病」の発生を確認しているため、穂肥施用に際しては穂肥診断基準に基づいて適期適量施用する。なお、穂肥診断基準は、稲作情報 N013 を参照する。

(3) 病害虫対策

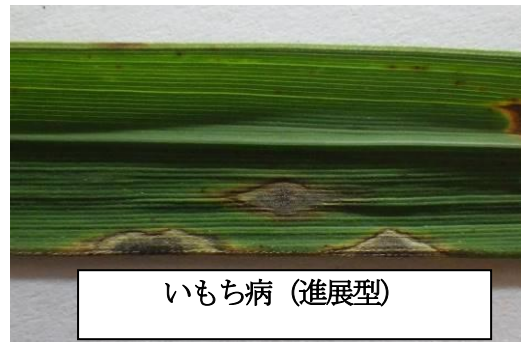
1) いもち病

- ・ 葉いもちの発生がみられる圃場や地域では、穂孕期の防除を徹底する ともに、発生が多いと予想される場合（上位3葉に葉いもち病の病斑を確認した時）には 穂揃い期にも臨機防除を行う。薬剤の使用にあたっては、使用時期や回数等の農薬の登録情報に注意する。
- ・ 圃場内に放置されている補植苗は「いもち病」や「ごま葉枯病」の温床になるため、すみやかに除去する。
- ・ いもち病の発生が著しい場合は、間断灌水において落水期間を長めにすることで、いもち病の助長につながるため、極端な落水はさける
- ・ いもち病は、葉色が濃い圃場で病斑（進展型病斑）を確認している。特に、風により茎葉の損傷や稲体の活力低下なども加わっているため、葉いもち発生に注意して観察し進展型病斑が認められれば臨機防除を実施する。
- ・ 窒素過多は発生を助長するので、適切な肥培管理を行なう。

【穂いもちの防除時期】



いもち病（停止型）



いもち病（進展型）



葉いもち病の病斑
葉色が濃い圃場にて確認

2) ウンカ類

- ・ 本年は、トビイロウンカの飛来量がここ 10 年間の中で最も多く、今後、早植え及び普通期水稻で発生が増加し被害を生じる恐れが高まっています。
8月の気温は平年並と予想され、本虫の増殖に好適な条件となっており、被害を生じる恐れが高まっていることから、今後の本田防除の適切な実施が極めて重要です。
については、図1 トビイロウンカにおける各世代の発生予測を参考に、圃場ごとの発生状況を確認したうえで防除対策を徹底する。
特に8月盆前後（8月12日～25日の間）には、6月27日飛来虫と7月7日飛来虫の第2世代幼虫の孵化ぞろい期となることから圃場の発生状況を確認して、適期防除につなげる。
特に飛来量が多かった7月7日飛来虫の第2世代幼虫の孵化ぞろい期にあたる8月21日～25日頃の発生量に留意して適期防除につなげる。
なお、トビイロウンカにおける各世代の発生予測は、その後の気温等により若干変わるので、最新データは、佐賀県農業技術防除センターHP等を参照する。

- ・ これまでの巡回調査では、トリフルメゾピリム剤を使用していない圃場でのトビイロウンカの定着率が高いため、圃場における発生状況を把握して第2世代幼虫の孵化ぞろいの防除は必須である。（7月下旬～

8月上旬のトビイロウンカ幼虫、成虫の頭数が要防除水準を超えており、7月末防除実施してもトビイロウンカの定着が多い圃場を散見するため)

管内におけるウンカ類の払い落とし調査(R2)

調査日	セジロウンカ		トビイロウンカ		ヒメトビウンカ		備考
	幼虫	成虫	幼虫	成虫	幼虫	成虫	
8月10日	幼虫	成虫	幼虫	成虫	幼虫	成虫	
6月14日移植	4	0	0	0	2	1	夢しずく情報田 ※トリフルメゾピリム ヘリ防除(7/29)
6月20日移植	5	1	0	0	0	3	さがびより情報田 ※トリフルメゾピリム



図1 トビイロウンカ各世代の発生予測(第4版、2020年7月21日作成)

- 6月10～15日(図では6月11日)、6月25～28日(図では6月27日)、7月6～11日頃(図では7月7日)の飛来虫を起点とし、佐賀市川副町の気温データより算出した有効積算温度(7月21日以降は平年値)を基に作成。
- 本種に対しては、**幼虫ふ化揃い期の防除効果が最も高い**。今後の各飛来波の**幼虫ふ化揃い期**(第一または第二世代)を、**赤枠**で図示した。
- 田植え時期、品種、地域及びこれまでの防除の違い等によって、本種の発生量は異なる。また、これらの田植え時期等によって、各飛来波に対する防除の重要度も異なるので、**各圃場の発生状況を確認し、適期防除を実施する**。
- 今後の**飛来状況**、**気象経過**に応じて本図は随時更新する。**最新情報**は農業技術防除センターのホームページを確認する。

3) コブノメイガ

- ・今年、6月10～15日頃、18日頃、25日～28日頃及び7月6～11日頃に飛来があった。
- ・本年は、断続的に飛来がみられたことから、飛来波ごとの幼虫の出現時期は異なると予想される。
- ・このため、1回の散布で全ての飛来波のコブノメイガを完全に防除することは困難であるが、トビイロウンカの発生状況も考慮して効率的かつ効果的な防除ができる時期に実施する。
- ・葉色が濃い圃場においてコブノメイガの食害が散見される。
- ・コブノメイガの防除適期は、発蛾最盛期の7日後(幼虫ふ化揃い期)である。
- ・被害葉が多くみられる圃場では、蛾の発生状況に応じて臨機防除を行う。



コブノメイガによる食害

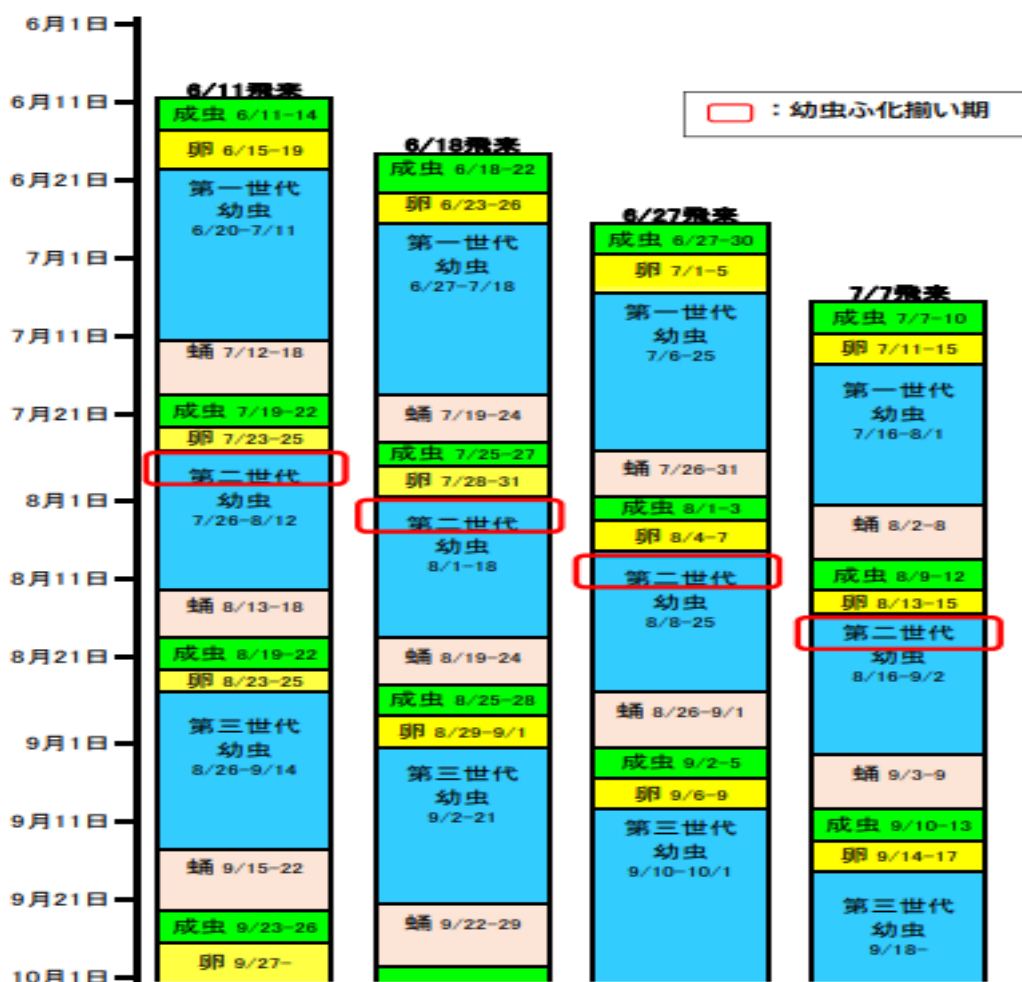


図2 コブノメイガ各世代の発生予測(第4版、2020年7月21日作成)

1. 6月10～15日頃(図では6月11日)、6月18日頃、6月25～28日頃(図では6月27日)、7月6～11日頃(図では7日)に飛来したコブノメイガを起点とし、佐賀市川副町の気温データより算出した有効積算温度(7月21日以降は平年値)を基に作成。
2. 本種に対しては、幼虫ふ化揃い期の防除効果が最も高い。今後の各飛来波の幼虫ふ化揃い期(第二世代)を、赤枠で図示した。
3. 田植え時期、品種、地域及びこれまでの防除の違い等によって、本種の発生量は異なる。また、これらの田植え時期等によって、各飛来波に対する防除の重要度も異なるので、各圃場の発生状況を確認し、適期防除を実施する。
4. 今後の飛来状況、気象経過に応じて本図は随時更新する。最新情報は農業技術防除センターのホームページを確認する。

4) 斑点米カメムシ

・夢しずくはまもなく出穂期を迎えることから、斑点米カメムシ類を中心とした乳熟期（穂揃い後10日目頃）の防除を徹底して、斑点米カメムシの被害防止を図る。

発生が多い圃場では穂揃い期（出穂後5日目頃）と乳熟期の2回防除を実施する。

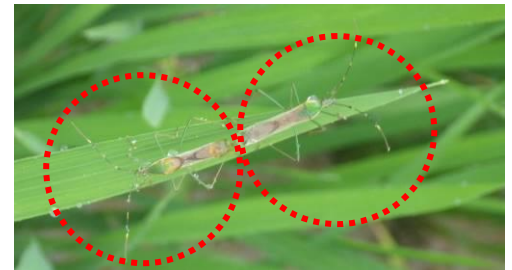
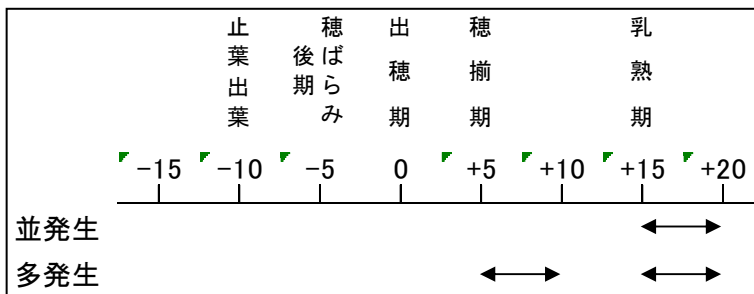
★多発生の目安 ⇒20回のすくいとり調査でカメムシが5頭以上の場合
(穂揃期～乳熟期)

・出穂10日前までの畦畔除草は、耕種的防除の観点から効果的であるので実施する。カメムシはイネ科雑草を好むことから畦畔だけでなく圃場内に発生している雑草の除草も併せて行うよう努める。また、畦畔を100mあたり歩いてカメムシが3頭いたら、要注意である。



エノコログサやヒエが多発している畦畔はカメムシの住処となっている

【斑点米カメムシの防除時期】



クモヘリカメムシ (体長16mm程度)

5) 紋枯病

・幼穂形成期以降は、各品種とも病気に対する抵抗力が弱まり、今後気温が高くなることから、紋枯病が一気に進展する可能性があるため発生には十分注意する。

・本病が発生している圃場では、病斑が上位葉の葉鞘に進展する前に防除を行う。

(液剤、粉剤の場合は出穂10日～20日前の防除を目安とする)



紋枯病

4. 大豆作情報（今後の管理）

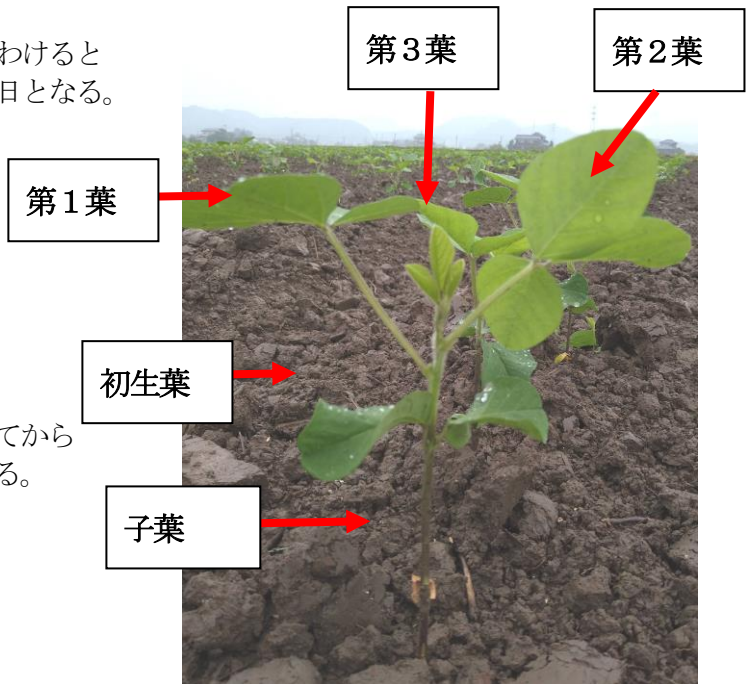
- ・ 7月の連続降雨により本年の播種盛期は、大きくわけると7月18日～7月21日及び7月30日～8月5日となる。

現在（8/10）、生育状況は以下のとおりである

- ① 7月18日～21日：本葉3葉～5葉期
- ② 7月30日～：出芽期～初生葉

- ・ 7月21日は播種された大豆である。
（本葉 第3葉目が出ている）

- ・ 「フクユタカ」は、初生葉（最初に出る双葉）が出てから本葉4葉くらいまでは4日に1枚程度で出葉する。その後、2～3日の間隔で出葉し、7～12葉で開花期となる。



(1) 中耕・培土

「中耕培土で根の活力を高めるとともに除草対策につなげる」

- ① 中耕・培土には様々な効果があり、積極的に収量を上げるための重要な作業である。

中耕・培土の主な効果

- 培土部分からの不定根の発生を促進し、養水分の吸収をよくする。
- 株元に土を寄せて、倒伏を防止する
- 土壌を膨軟にし、通気性を改善する
- 土壌を攪拌し、雑草の発生を抑える
（雑草を防除する）
- 畦が作られ、排水性が向上する
（表面排水を促進し湿害を受けにくくする）

- 1回目（本葉2～3葉期）…生育初期の雑草防除、土壌中への酸素供給。

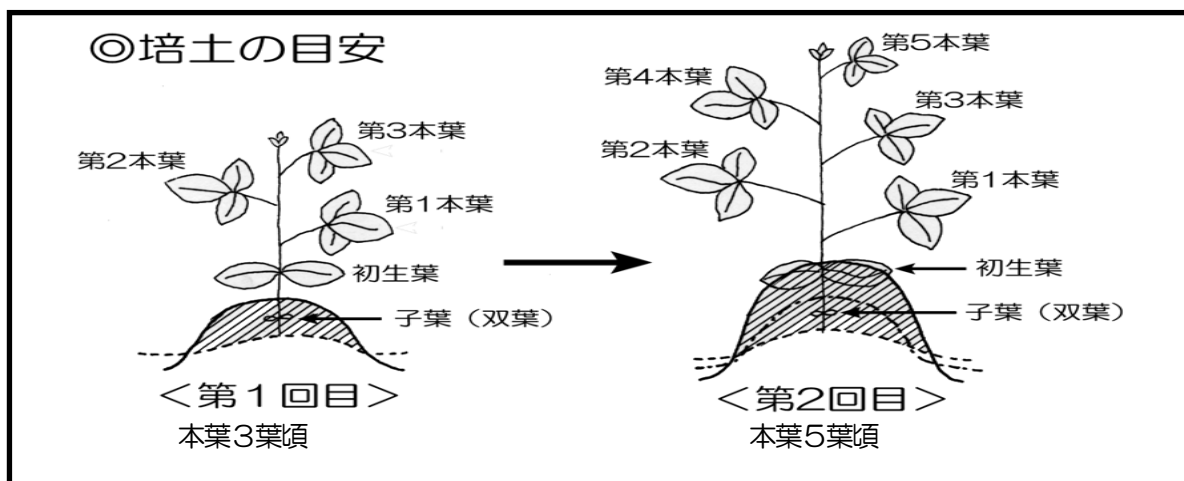
- 2回目（本葉4～5葉期）…除草効果＋土壌通気性向上
＋新根発生促進 ＋倒伏防止。

※ 培土は開花1週間前までに終了すること！

- ② 7月25日以降の遅まき圃場では中耕深を深めにし、コンバイン収穫時のロスを少なくするために培土の高さは子葉節までと、やや低めにする。

- ③ 水分ストレスによる急性萎凋症などが近年みられることから、中耕培土作業により表層排水を促し「排水溝の整備」を行う

- ④ 開花後の中耕は断根による悪影響が大きくなるので開花前に終わる。



2) 雑草対策

播種後、周期的な降雨により7月中旬播種の大豆において、雑草の発生が散見される。

○イネ科雑草が多いところでは、ナブ乳剤（イネ科雑草 3～8 葉期まで）、ポルトフロアブル（イネ科雑草 3～10 葉期まで）で防除する。なお、大豆バサグランとナブ乳剤の混用は薬害を助長するので避ける。

○アサガオ類が発生している圃場が散見されるので、圃場内はもとより、まくら地や畦畔で発生している場合も、必ず抜き取るか薬剤散布での防除を徹底する。

※出来るだけアサガオの本葉2～3葉までに処理する。ただしアサガオの種類によっては効果が劣る場合もある。

→アサガオ類は、繁殖力が強いことからそのまま放置すると次年度以降、さらに発生量が多くなるので、初発での薬剤防除を徹底する。

○また、近年ホオズギ類の発生も増加している。アサガオ類同様、難防除雑草であるため徹底した抜き取り、薬剤散布を行う。7月18日播種大豆の圃場において、昨年も発生を確認したヒロハフウリンホオズギは、すでに発生始期～3葉期までになっている。

※ 除草剤を散布する際は、周りの水稻にかからないよう注意し、無風時に処理する。

【除草剤一覧】

	散布方法	薬量	アサガオ		ホオズギ	ヒユ	イネ科	その他広葉	備考
大豆 バサグラン	全面	100～ 150ml/10a	△		△	△	×	△～○	だいたいの2葉期～開花前 (雑草生育初期～6葉期) ただし収穫45日前まで ※大豆の品種によっては薬害を生じるので指導機関に確認すること
	畦間	300～ 500ml/10a	△		△～ ○	△～ ○	×	○	だいたいの生育期 (雑草生育初期～6葉期) ただし収穫45日前まで ※大豆の品種によっては薬害を生じるので指導機関に確認すること
バスタ液剤	畦間	300～ 500ml/10a	○		○	○	○	○	収穫28日前まで (雑草生育初期)
ポルトフロアブル	全面	200～ 300ml/10a	×		×	×	○～◎	×	雑草生育初期 (イネ科雑草3～10葉期) ただし収穫30日前まで
アタックショット	全面	30～ 50ml/10a	○ つる化前	△ つる化後	○	○	×	△～○	薬害あり だいたいの2葉期～開花前 (雑草生育期) ただし収穫45日前まで

※農薬登録は、随時変更等がありますので、必ず最新の『農薬登録情報（農林水産消費安全技術センターHP：<http://www.acis.famic.go.jp>）』を確認してください。

2) 病害虫対策（主にハスモンヨトウ）

「白変葉がみられ始めたら、第1回目の防除を実施！！」

- ・今年、ハスモンヨトウが多く、今後高温乾燥で推移すると、ハスモンヨトウの発生量は多くなることが懸念される。

白変葉やハスモンヨトウの幼虫（若齢～中齢幼虫）がみられる圃場では、薬剤散布を行う。

※中～老齢幼虫に効果が劣るので、食害量の少ない若齢幼虫期に実施する。

- ・早めに播種された圃場において、大豆の生育ステージが「莢の伸長初期」の場合、カメムシ類にも効果のある薬剤を選択する。



7月18日播種された大豆に
「白変葉」を確認した（8月4日時の写真）
葉を裏返すと、ハスモンヨトウ幼虫が分散していた

